

【第4回】（平成25年11月11日）部会活動状況 於：美波町、南部総合県民局美波庁舎3階301会議室

【「人口減少時代における地域を支える仕組み
～地域が直面する重要課題への対応～」をテーマに
県南部地域で現地視察・意見交換】



徳島県総合計画審議会「若者クリエイト部会」 次第

日 時 平成25年11月11日(月)
午後3時から
場 所 南部総合県民局
美波庁舎3階301会議室

(～ 現 地 視 察 ～)

1 開 会

2 議 事

(1) 人口減少時代における地域を支える仕組み
～地域が直面する重要課題への対応～

(2) その他

3 閉 会

徳島県総合計画審議会「若者クリエイト部会」 現地視察(県南部地域)について

背景

我が国は、出生率の長期的な低下が続く一方、総人口に占める高齢者の割合が急速に増加するといった本格的な少子高齢社会を迎えております。

特に本県においては、全国に比べて早いスピードで人口減少や少子高齢化が進んでおり、経済規模の縮小や、過疎化の進行による地域の衰退など、社会・経済のあらゆる分野に大きな負の影響を及ぼすことが懸念され、「持続可能な地域づくり」に向け、人口減少や少子高齢化の加速を背景とした諸課題への対応が急務となっています。

目的

**「人口減少時代における地域を支える仕組み ～地域が直面する重要課題への対応～」
をテーマに現地視察を踏まえ意見交換**

県南部地域への現地視察を行い、前回の県西部地域に引き続き、県内でも一層厳しい条件下に置かれている過疎地域において、創意工夫を重ねながら、地域が直面する喫緊の課題に対応するべく、地域の実情を踏まえた「現場目線の津波減災対策」や、全国屈指のブロードバンド環境や豊かな自然など、地域の強みを活かしたこれまでにない集落再生の取り組みである「サテライトオフィス」の現場を視察していただきます。

現地視察を通じて、現状や課題について感じたことや、様々な観点から、幅広く意見をいただき、今後の県政推進にあたっての参考にするとともに、可能な限り県の施策等に反映することを目指します。

全体行程表

11月11日(月)

| 時刻 | 内容 |
|--|---|
| 12:00 移動 70分 | <p>出発 (県政バスに乗車し視察地に向けて移動)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・乗車場所: 県庁北門 (※今回の現地視察の概要などを車中にて説明) |
| 13:10 (見学 30分+ 視察現場への 移動 10分) 移動 15分 | <p>視察ポイント① (津波減災対策関係)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・場所: 中由岐避難場所 (美波町中由岐地区・急傾斜地崩壊防止施設) (海部郡美波町西の地字東地) ・概要: 地域の喫緊の課題である津波減災対策について、自主防災組織等の取組みの現場を視察していただきます。 |
| 14:05 (見学 30分+ 視察ポイント ③④への 移動 20分) | <p>視察ポイント② (地域振興(サテライトオフィス)関係)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・場所: (株)鈴木商店 徳島クラウドオフィス「美雲屋」 (海部郡美波町恵比須浜210) ・概要: 全国屈指のブロードバンド環境や豊かな自然など、地域の強みを活かしたこれまでにない集落再生の取組みを視察していただきます。 <p>視察ポイント③ (地域振興(サテライトオフィス)関係)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・場所: サイファー・テック(株)「美波Lab」 (海部郡美波町恵比須浜字田井266) ・概要: 視察ポイント②に同じ。 <p>視察ポイント④ (地域振興(サテライトオフィス)関係)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・場所: (株)あわえ (海部郡美波町日和佐浦118) ・概要: 視察ポイント②に同じ。 |
| 移動 5分 | |
| 15:00 (会議 60分) | <p>意見交換会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・場所: 南部総合県民局 美波庁舎 (海部郡美波町奥河内字弁才天17番地1) ・概要: 今回の視察を踏まえた意見交換を行っていただきます。 |
| 16:00 移動 90分 | <p>※ 終了次第、県庁へ向け出発 (希望者は現地解散も可能)</p> |
| 17:30 | <p>到着 (県庁に到着・解散)</p> |

※ 当日は、交通事情等により時間が前後する場合がありますので、御了承下さい。

【第4回】

日時:平成25年11月11日(月)午後

場所:美波町、南部総合県民局美波庁舎3階301会議室

内容:「人口減少時代における地域を支える仕組み ～地域が直面する重要課題への対応～」をテーマに
県南部地域への現地視察及び意見交換

1. 部会の概要

「人口減少時代における地域を支える仕組み～地域が直面する重要課題への対応～」をテーマに、「南海トラフ巨大地震」に備えるべく、地域の実情を踏まえた津波減災対策や、全国屈指のブロード環境や豊かな自然など地域の強みを活かしたこれまでにない集落再生の取り組みである「サテライトオフィス」の現場を視察した後、意見交換を行った。

2. 主な意見

(1)【津波減災対策関係】

○ 視察地域は、少子高齢化や住民の意識低下、地域コミュニティ組織の減少等、社会の大きな課題が蓄積しており、地域社会を維持しながら、人と人をつなげることによる津波減災対策の施策が同時に望まれていると感じた。
その中で、由岐地区の参加型訓練である「避難まつり」は、独自の避難訓練プラスアルファが趣旨として活かされており、他の地域でも活用してほしい。

○ “地域コミュニティ”や“まちづくり”の取り組みが災害時にも有効であり、それは少子高齢社会を切り抜ける方法と同じであることを改めて感じた。

(2)【サテライトオフィス関係】

○ サテライトオフィスは他県でも過熱し、これからは誘致合戦になる。最終的には金銭ではなく地域性が選択の決め手となってくるはず。そういう意味で、「(株)あわえ」が「文化の保存」を主業務としている着眼点は素晴らしい。

○ 「増川笑楽耕」を活用しているのは地元出身者、「サイファー・テック(株)」の社長も地元出身者ということで、動機付けということでは地縁、血縁は非常に重要な要素。そういった地元ゆかりの方々に地元の状況や取り組みを上手く発信し、地元回帰がなされるような仕組みができればよいと思う。

(3)【地域づくり関係】

○ 日頃からの地域コミュニティの大切さを考えさせられた。人口減少、超高齢化社会を迎える地域では、災害への対策のみならず、医療や福祉、介護の問題においても、インフォーマルなつながりが“その人らしさ”を支えていくと言われており、希薄化している地域の繋がりを、地域のお祭りや政に、若い世代(ここではサテライトオフィスの皆さん)が参画することにより、地域を盛り上げ、健全なコミュニティの回復に一役果たしているように感じた。

○ 若い方が活動するためには雇用対策は必要不可欠であり、さらに、子どものために、地域のためにというインセンティブがあってこそ成り立つものだと思う。サテライトオフィスを構える会社の社長の多くが、その土地の出身者であることにとっても共感できた。スタッフの方々の趣味であるサーフィン、釣り、イノシシ狩り等々はその地域の魅力であり、その地域に住まうインセンティブ。

○提言一覧

テーマ:「人口減少時代における地域を支える仕組み ～地域が直面する重要課題への対応～」

| No. | 提 言 内 容 |
|-----|--|
| | <p>【ポイント】 「今後の持続可能な地域づくり」に向けた議論 ①津波減災対策関係 ②地域振興(サテライトオフィス)関係</p> |
| 1 | <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 避難場所について、「ここに逃げるんだ」と具体的にイメージできているのはすごくいいこと。80歳以上の方が荷物を担いで「中由岐避難場所」へ上がるのは厳しいと思うので、飲み物、食べ物などが備蓄できていたら、よりよいのではないか。 ・ 日和佐在住で、「美雲屋」に古民家を貸して観光ボランティアもしている方の話では、地震への備えについて、周辺住民の意見は、「県はよくしてくれており、あとは自分たちで何とか避難訓練等も盛り上げながら取り組んでいかななくては」という雰囲気とのこと。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 古民家を貸す話があったとき、その家で育った父親は難色を示したが、母親と本人は、地域の活性化に繋がるならありがたい話で長く使ってほしいと思っており、地域住民と交流があるだけでもありがたいのに、観光ボランティアには端末による観光案内のレクチャーもあるということで、本当に喜んでいる。 ・ パソコン関係の学校を卒業し都会で働いていた人が、「何でもいいので仕事を」と掛け合ったが、「それはまだ将来的なこと」という話だったとのこと。 ・ 100年以上経っている銭湯や建物で最先端のICTの仕事をしているというギャップがすごくおもしろいが、私たちが思っている以上に都会の人には魅力的に映るのではないか。ただ、サーフィンや釣りなど趣味に惹かれて来ているように感じたので、結婚や定住に繋がるかといった点についてはどうなのかなと思った。 ・ ネット環境があれば、「全国何処でも出来る仕事を思いきって田舎で！」というのは、都会に住む人にも一定のニーズがあり、地域の小・中学校で教えたりするのも今まで選択肢になかった新たな職業や働き方の発想に広がりを持たせてくれると思うので、将来的に地元雇用に繋がるような、来てくれた方が永住してもらえるような長期的な取り組みも大切ではないか。 ・ やはり人間は楽しいところに集まる。参加して楽しい避難訓練、住んで楽しい町(通勤ラッシュの時間がサーフィンタイムに)といったPRは大切。 |
| 2 | <p>①</p> <p>【中由岐避難場所】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 諦めの気持ちを持っている方が多くいるということに驚いた。雰囲気の改善には地道なコミュニケーションの積み重ねが重要なので、今後も自治体の方々には頑張ってもらいたい。 ・ 「事前復興まちづくり計画」については、各家庭にどの程度の経済的被害が出て、残る財産はどの程度で、その財産をもってどのような復興が可能なのか、といった感じでリアリティを持たせる必要がある。空想のような話のままでは真剣に考えてもらえないのではないか。 <p>②</p> <p>【(株)鈴木商店「美雲屋」】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 古民家の再利用、地域イベントへの積極的な参加など、サテライトオフィスを象徴するような参入。近隣サテライトオフィスとの連携が地域定着へのカギなのではないか。 ・ 見た人が羨ましくなるようなオフィスはインパクトがあるので、リフォームを推奨するような助成金を出すと効果的かもしれない。 <p>【サイファー・テック(株)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ サテライトオフィスを開設して1年以上経ち、成熟してきた印象を受けた。インターン合宿や地元の学校での講義は未来を見据えた良い活動。美波のサテライトオフィスのリーダーとして今後も活躍を期待する。 <p>【(株)あわえ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ サテライトオフィスは他県でも過熱し、これからは誘致合戦になる。最終的には金銭ではなく地域性が選択の決め手となってくるはず。そういう意味で、「文化の保存」を主業務としている着眼点は素晴らしい。 |

| | |
|---|--|
| 3 | <p>(①②共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> 今回の視察では、日頃からの地域コミュニティの大切さを考えさせられた。人口減少、超高齢化社会を迎える地域では、災害への対策のみならず、医療や福祉、介護の問題においても、インフォーマルなつながりが“その人らしさ”を支えていと言われており、希薄化している地域の繋がりを、地域のお祭りや政に、若い世代(ここではサテライトオフィスの皆さん)が参画することにより、地域を盛り上げ、健全なコミュニティの回復に一役果たしているように感じた。 若い世代が地域の中で活動するためには、その地域に若者が根付く必要があり、仕事や魅力ある資源(古民家、自然環境等)を最大限活用し、若者が定住したいと思える町づくりを考えていく必要がある。 |
| 4 | <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> 美波町由岐湾内地区で、既に「震災前過疎」が起こっていることに驚いた。確かに「想像も超える大きな津波が来る」「高い確率で起こる」と何回も言われれば、余裕がある方は違う土地へ引っ越し、どこにも行くあてのない方は諦めの境地になるのも無理のないこと。震災への恐怖が過疎を更に深刻にしている現状は、人口減少時代にますます拍車をかける事態となっていることを実感した。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> 視察したサテライトオフィスのうち、あるオフィスは数か月前に開設したばかりで、古民家をお洒落に改築し、スタッフの皆さんも趣味を楽しみながら仕事をされていた。もう一つは本社が美波町にあり、ICT関連の業務だけではなく別の会社を設立し、地域の再構築を目指す新しい取組みを始めようとしていた。株式会社として利益を追いながら地域活性化を目指すという公益性の高いものとの印象を受けた。 <p>(①②共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> 視察を通じて得たキーワードは「まつり」。美波町由岐湾内地区では「避難まつり」と題した避難訓練を行っており、「みんなで一斉に避難し、避難場所にできるだけ長く留まってもらうことで、状況を分かってもらうことが重要」と伺った。諦めの境地になっている方は訓練にも出席されない方が多いようだが、若い人々が地域で活動し、災害は起こるものとして、いかにすればその被害を最小限に食い止めることができるのかという前向きな姿勢で、官民一体となった「事前復興まちづくり計画」を推し進めることにより、そのような方も巻き込んでいけるのではないか。 若い方が活動するためには雇用対策は必要不可欠であり、さらに、子どものために、地域のためにといいインセンティブがあってこそ成り立つものだと思う。サテライトオフィスを構える会社の社長の多くが、その土地の出身者であることにとっても共感できた。スタッフの方々の趣味であるサーフィン、釣り、イノシシ狩り等々はその地域の魅力であり、その地域に住まうインセンティブ。 サテライトオフィスの方々も口を揃えて「まつり」の話をしていましたが、地元で開催される祭りに参加することで地域との繋がりが生まれ、その地域自体も活性化されているのではないか。県西部地域の視察では、高齢化社会において、元気なお年寄りが地域の活性化を担っていたことが印象的だったが、今回の視察では、若者が地域に居ることがいかに重要であるかを実感した。 |
| 5 | <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> サテライトオフィス誘致に使われた、“自然の中でPC片手に仕事”の写真に代表されるようなライフスタイルが、実際にきちんと機能している様子の一端を見ることができた。 徳島県がサテライトオフィスの先進地であることや、現状の優位性を維持していく方法を考えるべき段階にあるということを知ったが、「(株)あわえ」の移住サポートのパッケージを様々なセクターが協働して、しっかりとしたものを作り上げることができれば大きな強みになるのではないか。 観光とは違って生活に密着した情報が必要になってくると思うが、住民票を移した時に自治体でもらえる“引っ越しセット”のようなもの(周辺の地図や買い物ができる場所、ごみ収集日カレンダー、学校の情報など)の企業向け版を、サテライトオフィスを設置するエリアやその周辺の自治体、ボランティアな組織などが取りまとめることができれば、サテライトオフィスとその従業員向けはもちろん、様々な層の移住者に対応できるのではないか。幸いにも既に多くのサテライトオフィスがあるので、こちらに来た際に不便を感じたり、どういった部分に魅力を感じたかなどの情報を集めることは難しくないように思う。 県南にサテライトオフィスを設置した企業は、南海トラフ巨大地震への何か有効な対策を持って徳島を選んでいるのか。県内でも特に被害が甚大と予想されるエリアに越してくるのはリスクが大きいように思うが、それでもこちらで新設していることに今更ながら少し疑問を持った。 |

| | |
|---|--|
| 6 | <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 避難階段を登ったとき、目の前に広がる海の景色がとても綺麗と感じると同時に、もし今ここに津波が来たらと考えると恐ろしくなった。住民にも諦めの気持ちが蔓延していると聞いたが、板野町でも諦めの気持ちを持った人は少なからずいる。説明にもあったが、ハード面、メンタル面の両方の減災対策を行うことが今後必要となり、また、徳島県全体として広域で取り組むことも大切になってくると感じた。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 古いものを活かして新しいものに活用していくことは、今の時代に求められていると改めて感じた。 ・ 「(株)あわえ」で伺った、耕作放棄地を利用してブランド米を作り、干物や野菜も一緒にインターネットで販売するという話に興味を持った。ICT企業に採用され勤めるには、技術も知識も必要とされ難しいところもあると思うが、地元の産業を活かしたのなら新たな雇用も出てくる可能性があると思う。地産地消や安心・安全な食品が求められているので、今後この取組みが広がってほしい。 |
| 7 | <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「災害に対する諦め感の蔓延」「行政と住民のボタンの掛け違い」という言葉が今回の視察で印象に残った。県でも機会あるごとに意識啓発を図り、災害対策に取り組んでいるが、住民ニーズを踏まえ、行政の一方的なものではなく、持続可能な取組みとして住民と意識を共に取り組んでいくことの重要性を改めて感じた。 ・ 災害対策はじめ全般に言えることだが、まちづくりの主体となるのは住民であり、自分たちの集落を自分たちの手で維持していくという「地域力(コミュニティ)の向上」、住民同士のつながり、支え合いが、集落の維持、災害時の際の“力”として期待される。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 仕事と生活の調和の実現や人材確保、また東日本大震災を契機としたリスク分散の観点からの「サテライトオフィス」移転の動きが見られ、神山町をはじめ、美波町、三好市にもサテライトオフィスが進出している。それに至るには、ブロードバンド環境の良さはもちろんのこと、視察ツアーの受入支援、空き家等の確保など、企業、行政、地域団体とともに、受入体制の整備も必要となる。 ・ 多数の方が徳島を訪れ、様々な分野のキーパーソンが集まることでコネクションが生まれ、人同士の繋がり、地域の「担い手」となり、地域との交流、サテライト企業と地元企業とのコラボによる新たな事業展開などが期待される。 ・ ソーシャルメディアを利用した情報発信などにより、地域の魅力を活かし、地域に愛着や誇りをもっていただけるようなサテライトオフィスの誘致促進が今後ますます重要になると感じた。 |
| 8 | <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 少子高齢化の進行、津波被害、住民マインドの低下、自治組織の減少など、今回視察した由岐湾内地区には多くの課題があり、何かこれをすれば地域の活性化が図られるというものはないかなかなか見つけられないと思った。ただ、「事前復興まちづくり計画」の策定は、まちづくりの第一歩として大変意味のあることだと思うので、地域で計画を策定しようと思えるように行政は支援をしていく必要があると感じた。 ・ 災害対策を進めるには、地域住民と共に取り組むことが重要だということを再認識させられた。 ・ 津波浸水予測や津波災害警戒区域の公表は、計画を策定するために必要であるのは確かだが、あくまでも公表は防災対策を進めるための手段であって目的ではないことを忘れないようにしたい。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ サテライトオフィスを誘致するためには、徳島県にきたいという動機付けが必要で、現在は、全国屈指の高速ブロードバンド環境や全国に先駆けた行政支援がそれに当たると思うが、いずれ他県も追いついてきて誘致合戦が始まることが予想できる。その中で、県内に誘致するためには、徳島にサテライトオフィスをつくった企業が上手くいっていることがサテライトオフィスを検討する企業の安心感を生み、その上で、自然や田舎体験(古民家、農業等)など都市部にはない地域の売りをうまくPRしていければよいのではないかな。 ・ 県西部地域の視察先「増川笑楽耕」を活用しているのは地元出身者、今回の視察先の「サイファー・テック(株)」の社長も地元出身者ということで、動機付けということでは地縁、血縁は非常に重要な要素と考える。そういった地元ゆかりの方々に地元の状況や取組みを上手く発信し、地元回帰がなされるような仕組みができればよいと思う。また、県内でサテライトオフィスを誘致するとしても、サテライトオフィスが地域に及ぼす影響や誘致の意義は、その地域の規模や状況によって変わってくるのではないかな。 ・ 2009年に徳島市にスタジオを開設した「ユーフォーテーブル」は、阿波踊りのポスター制作や、街おこしアニメイベント「マチ★アソビ」を開催するなど、新たな雇用創出だけでなく、地域と企業が連携し、その企業の特徴を活かした地域活性化事業が展開できた事例と思う。 サテライトオフィス誘致により地元雇用が増えれば良いことだが、それに加えて、これまでになかった文化や発想、人材がその地域と繋がりを持ち、これまでにあった地域の文化等と化学反応を起こし、地域の活性化につながることも重要ではないかな。そうした現象が起こせるような仕組みづくりを進めていければよいのではと思う。 |

①

【自分たちでできることは自分たちで】

- ・ 視察した地域は南海トラフの被害想定が非常に厳しいが、取り組んでいる減災対策は全国でも有数の先進地と思う。以前、由岐地区の取組みを県外の研究者と視察した際「徳島県はすごいね」と言われたことがある。こう言われると県南地域とそうでない地域の温度差を感じざるを得ない。
- ・ 阪神淡路大震災で被災した神戸の大学では、1年生の授業で、消防隊員から「大きな災害があった時は、あなたのもとへ助けに行けないと思ってください」とアナウンスがある。災害時の道路状況や、学生よりもっと深刻な要援護者がいることの想定上であるが、この話を聞いた時、自分自身も誰かに頼ろうという気があったのでは、とドキっとしたことを思い出した。
- ・ 由岐地区のような地域レベルの減災対策はどこでも必要であるが、自分の居住地域で由岐地区ほど取組みができていないことを痛感、猛省すると同時に、「西の地防災きずな会」のように、行政支援に頼りすぎず、まずは自分たちができることを考え実行する習慣も養わないといけないと思った。

【地域リーダーの不在】

- ・ 常時から地域リーダーがいる地域とそうでない地域とでは、非常時(災害発生後等)の立ち上がりの早さが全く違うと言われている。どの地域でも志の高い地域リーダーが自然発生するわけではないので、まずは、防災を前提にしたものものでなくて十分なので、地域に関心を持つ人を増やすために、地域の中に“楽しみ”があり、地域活動を継続できる仕組みが必要。

関心を持つ人を増やすステップとして、例えば、

1. 地域の中に“楽しそう”で“参加したい”と思うイベントや活動がある
2. 参加したいイベントや活動に、実際に“参加する(できる)”
3. イベントや活動を主催する特定の自治組織(子供会・青年会・婦人会など)のメンバーになる
4. 自治組織の主要メンバーになる
5. リーダー研修等を受け、地域リーダーとなる

(ステップが進むごとに人数は減るイメージ)

- ・ 地域の中で裾野を広げることも、リーダーを育てることも両方重要で、自治活動の種類が多ければ、老若男女(女性の視点は絶対必要)多様なメンバーも期待できる。
- ・ “楽しみ”となると、地域の伝統的な祭りはキーワードになると思う。

9 【地域理念の共有】

- ・ まちづくり系のシンポジウムで最近よく耳にするが、結局は、一般的に言われている“地域コミュニティ”や“まちづくり”の取組みが災害時にも有効であり、それは少子高齢社会を切り抜ける方法と同じであることを改めて感じた。
- ・ 厳しい現状だが、災害が起こらなくても人口が減少していく集落は多数あるので、由岐地区の「事前復興まちづくり計画」のような持続可能な地域のグランドデザインを見直す作業はどこも必要。しかし、自身の将来不安や地域の課題が多くある中で、具体的なまちを描くことはなかなか難しく(むしろ、ある程度地域理念が共有できるまで描かない方がよい?)、最低限“地域の理念”を共有するために、地域で話し合った経験を持つことが重要と思う。

②

【徳島の魅力】

- ・ 古民家を改修したサテライトオフィスの見学は神山に続き2度目。古民家に魅力を感じて活用することは、地域資源の保存という意味でも意義深い。県下には立派な古民家が多く残っているが空き家も多く、10年も放置すると改修しても使えなくなるものが多数あると聞いた。古民家の改修も今が最後のチャンスかもしれない。
- ・ 長期的な戦略がなくオフィスとして立ち上げられるのも不安だが、最初の一步に徳島の古民家を選んでもらえるに越したことはない。そのためには、サテライトオフィス誘致のセカンドステージとして、“徳島独自の”サテライトオフィスの魅力発信をしていくべき。
- ・ 神山で、最も役立っている行政支援は「徳島空港にオフィス専用の駐車場を貸してもらっていること」と聞いた。品川駅の乗換よりも徳島空港で飛行機から自家用車に乗り換える方が早いようで、目から鱗な回答で驚いた。出張時の移動の問題さえクリアすれば、アスクルやアマゾンのおかげで東京本社と何ら変わらない(むしろそれ以上の)業務クオリティが保てているとのこと。

【地域振興×株式会社】

- ・ このような意見を逃さないためには、県下に既にオフィスを立ち上げている企業や移住者に常に寄り添い、意見を集約するような機関が必要。「(株)あわせ」の取組みはそんな視点を網羅しており、今後の活躍が楽しみ。
- ・ 地域振興に株式会社が携わっている例は既にあるようだが、民営化というと利益の追求とサービスの質の両輪を心配するケースが多い。「地域振興の担い手は株式会社でも問題ない！」という前例を徳島県から発信してほしいと思った。

| | |
|----|---|
| 10 | <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 当方も過疎地域に住まう点では由岐地区と同じだが、こちらは祖谷の山間地域。住民の日常の不便や将来への不安は同様に感じていたが、由岐地区の明日直面するかもしれない危険については、深刻さを感じざるを得なかった。また、東日本大震災以降、全国で防災に関する指標の見直しや意識が高まる中、該当する地域では、つきつけられる危険性と、どうすることもできない現実に動揺する住民の心情が伝わってきた。 ・ 印象的だったのは高齢者の諦め感。直接住民の声を聞いた訳ではないが、「そのときは、みんな一緒に…」などという発言があることを聞くと、「震災前過疎」同様、「震災前被害」とでも言うべき精神的苦痛が少なからず発生しているのかもしれないと感じた。 ・ 予測される最大限の危険性を把握することはもちろん重要だが、その危険回避の実現可能性が住民それぞれに理解されることとのバランスが重要と感じた。恐らくそのあたりが、行政、自主防災組織でも苦心している部分かと思う。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ サテライトオフィス事業は、労働環境や企業のリスク分散の側面など企業側のメリットはもちろん、地域にとっても経済的、社会的メリットがある、現代テクノロジーが生んだ次世代の働き方、企業経営と思う。その取り組みが先進的に徳島の過疎地域に根付きつつある現状はとても素晴らしいと思った。 ・ 本社を構える大都市圏からの最低限度のアクセス性は欠かせないファクターと聞いたが、県西部祖谷の山奥では少し難しいビジネスモデルのような気もした。 ・ ネットインフラが整っていれば、どの中山間地域でも適用できるというモデルではないかもしれないが、条件が揃っている地域であれば積極的に誘致すべきと感じている。大企業の工場誘致のように大きな投資が必要ではなく、何より当該地域への負の影響はほとんどないはず。 ・ サテライトオフィスで働く若者が地域に定住するかどうかは大きなテーマかもしれないが、その点にばかり固執せず、一人でも多く交流人口が増加することによるプラス効果に着目していけば、地域として得るものは多いと感じた。 |
| 11 | <p>①</p> <p>【ソフト面】</p> <p>「地域社会力の維持と向上」・「広域での対応力」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 視察地域は、少子高齢化や住民の意識低下、地域コミュニティ組織(婦人会等)の減少等、社会の大きな課題が蓄積しており、地域社会を維持しながら、人と人を繋げることによる津波減災対策の施策が同時に望まれていると感じた。その中で、由岐地区の参加型訓練である「避難まつり」は、独自の避難訓練プラスアルファが趣旨として活かされており、他の地域でも活用してほしい。 ・ 広域での津波避難対策を考える必要性も感じ、県同士でもカウンターパート方式で被災地から離れた地域からの支援協定があるように、市町村単位でも一層の広域での支援体制整備が必要。 ・ 津波減災対策において、行政側と住民側が、共通意識を持って今後の取り組みや方向性を十分議論しながら共に進める必要性も改めて感じた。 <p>【ハード面】</p> <p>「避難場所での備蓄対策」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 津波避難場所での備蓄が十分でない印象を受け、県南沿岸部の高台避難場所等における備蓄の配備支援がまだまだ必要ではないか。購入時の援助や保管場所の確保支援が必要と思う。 <p>「津波避難救助艇」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 県南沿岸部に地形上、近くに高台や高いビルがなく、津波避難タワーなどの整備も困難な地域がある。特に、幼児、高齢者、身障者、病人等の災害時要援護者の遠方までの避難が事実上困難なケースもあり、現在、四国運輸局で検討中の「津波救命艇」導入による「浮いて助かる命」といった視点からの施策も必要ではないか。命が助かる様々な方法を思案すれば、沿岸部地域への新たな整備の必要性を感じる。 ・ 必要なのは、ソフト面とハード面の両輪を地域住民と共に考え、新たな津波減災対策の施策へ反映していくこと。 <p>②</p> <p>【古民家を再利用・地域の行事(祭り等)への参加】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域の古民家をリフォームしてオフィスにしており、再利用によって古民家が生まれ変わる点が衝撃的だった。古民家の再利用費の支援や、古民家のリフォームから地域への紹介までの一環した相談・支援体制がもっとあれば良いのではないかと。 ・ どのサテライトオフィスでも地域の行事(祭り)への参加が多くあり、地域密着型のコミュニケーションによって地域に根付き、地域との良い関係づくりが生まれていると感じた。それらのつながりから、その地域で新たな雇用が生まれてほしい。 ・ 「(株)あわえ」が、多くの地域住民が利用したであろう銭湯をリフォームして、「文化の保存」を活かした活動の方向性が感動的だった。新しい視点であり、今後のサテライトオフィスのモデルとなってほしい。 ・ 県下のサテライトオフィス全部が集まって、様々な意見交換や支援策・提言を話し合う協議会的組織があれば、一致団結で今後の更なる大きな展開へつながるのではないかと。 |

| | |
|----|---|
| 12 | <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災時、東北で「昔ながらの道」がすごく便利に使えたとのこと。「四国の道」が防災的な視点で使えたらよいのではないか。「『四国の道』のスポットに防災グッズがあれば役に立つのでは」といった話を聞いた。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> 由岐に来ていた「地域おこし協力隊」が一年で帰ったという話を聞き、その理由を尋ねると「仕事をふりすぎた」とのこと。地域の魚をお中元、お歳暮に送るといった仕事で、核になってやっていけそうなところでいなくなり止まってしまうのは寂しい。そういったところをつないでいけば、避難を呼びかけても出てこないおばあちゃんも、そういう人には心を開いて出てくるかもしれないし、何かそういった「つながり」になるのではないか。 サテライトオフィスはある意味すごい成功例。初めて美波のサテライトオフィスに来たが、すごく勉強になることが多かった。 |
| 13 | <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> 津波からの避難について、県南の方はすごい危機感を持って自分のこととして考えている。徳島市でも5～6メートルとされており、実際に起こった場合、一番被害が大きいのは徳島市など北の方。地域的な温度差を実感すると同時に、考え過ぎもいけないが備えをしっかりと進めていかなければと思った。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> 「震災前過疎」については、やはり地域に産業が必要。サテライトオフィス誘致により、若い人が来て、地域が元気になってきたら、「震災前過疎」問題も解消に向かっていくのではないか。 |

【第5回】（平成26年1月31日）部会活動状況 於：県庁10階大会議室

【部会活動報告、
「人口減少時代における地域を支える仕組み
～今後の徳島づくりを見据えて～」をテーマに意見交換】



徳島県総合計画審議会「若者クリエイト部会」 次第

日 時 平成26年1月31日（金）
午後4時30分から午後6時まで
場 所 徳島県庁10階 大会議室

1 開 会

2 議 事

(1) 部会活動報告

(2) 意見交換 テーマ：人口減少時代における地域を支える仕組み
～今後の徳島づくりを見据えて～

(3) その他

3 閉 会

【第5回】

日時：平成26年1月31日(金)午後4時30分から

場所：県庁10階大会議室

内容：「人口減少時代における地域を支える仕組み
～今後の徳島づくりを見据えて～」をテーマに意見交換

1. 部会の概要

平成25年度における部会の活動状況について、部会長から報告を行った後、「人口減少時代における地域を支える仕組み～今後の徳島づくりを見据えて～」をテーマに、過疎地域への二度にわたる現地視察やこれまでの議論をふまえ、「今後の徳島づくり」について意見交換を行った。

2. 主な意見

(1)【徳島の現状・課題】

○ 空き家でも、日本にはあまり残っていないような民家がまだまだ多数放置されていると思うが、二、三年放っておくことによって、まだ手を入れたら間に合うものがなくなってしまうこともある。そういうところにもフォーカスした「空き家の活用の仕方」というのもあるのではないか。

(2)【必要な取り組み】

○ 移住支援として、幅広い情報網を使って、各エリアごとに、「この地域で住む」「いきなりやってきて住める」「住んですぐに楽しめる」ような、生活面、社員がすぐ楽しめるパッケージをつくることができれば、もっといいのかなと感じた。

○ 人がどんどん減っていくと、行政にかけるお金や人も減ってしまい、人が徳島県全域に広がっていると行政サービスの質がどうしても落ちてしまうので、行政サービスが厳しくなってきた地域の住民に行政サービスが潤沢にできるところに引っ越してもらい、それに対して助成金を出すといった手助けをしてはどうか。

○ 「先取りする力」の重要性を踏まえ、全国初の二度の国文祭をしている「文化に強い徳島」という面からいうと、ターゲットをお金も時間も余裕のある年配の方に絞れば「俳句」という趣味があり、徳島を俳句を楽しめるまちにしていってはどうか。全国的な俳句大会を開催すると、全国から人が集まって来るので、観光客も増えていくのではないかと思う。

○ 徳島の中心産業である農業は、所得を得るだけでなく、「国土の保全」とか「国民の食を支える」という非常に「カッコいい職業」であるということが、いまいち伝わってないので、「農業やってみたいよな」という、小さいときから職業の選択として「農業」が頭に浮かぶような教育というのができたらいい。

(3)【本県が有する可能性】

○ 「徳島県が有する可能性」というのは、自然もさることながら「人」と思う。「徳島県人名鑑」を作って、徳島県で認定をしていき、それを全国、世界に発信していくと、かなり可能性が広がるのではないか。

○ ポジティブに捉えると「心の豊かさ」を満たしてくれるのが徳島のいいところ。「心の豊かさ」を売るという意味では、徳島はナンバーワンに近いのではないかなと思っているので、老後も楽しく暮らせて、お年寄りもみんな移住してくるぐらいの県にできたらおもしろいと思う。

○提言一覧

テーマ:「人口減少時代における地域を支える仕組み ～今後の徳島づくりを見据えて～」

| No. | 提 言 内 容 |
|--|--|
| <p>【ポイント】 テーマ「人口減少時代における地域を支える仕組み」について、「今後の徳島づくり」を見据えた議論 ①徳島の現状・課題について感じたこと ②必要な取組み ③本県が有する可能性</p> | |
| 1 | <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 県全体として人口の減少が著しい。大学を卒業した若者が戻って来たくても、就職先がなく県外で就職し、そのまま結婚して住んでしまうパターンが多い。このままでは益々高齢化と人口の減少が続く。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ まず若者に帰ってきてもらえる県を目指す。企業の誘致。サテライトオフィス等、ブロードバンド環境が整っていれば地方でも働ける新しい分野の企業にも来てもらえるような取組み。 ・ 大学を卒業し、徳島で就職をするためにUターンした若者には何か特典を(例えば「家賃の一部補助」「車購入費用の一部補助」等)。さらに徳島県内で結婚してくれた夫婦に対しても何か特典があると、帰省するきっかけにはなるかもしれない。 ・ イターン希望の若者を増やす。田舎暮らしの利点のアピール。「子育てするなら地方!」というブランド力をもっと前に打ち出し、「大きな家で伸び伸び子育てができる」「安全な食や水」「保育園・幼稚園・ファミサポなどの充実(待機児童少ない)」「満員電車に乗らなくても通勤できる」「サーフィンやサイクリングなど自然を生かした趣味が楽しめる」などのイメージを広くアピールする。 ・ Uターン、イターンにしろ、徳島は田舎だが、都会で暮らすより(少々給料は下がっても)、実質は豊かな暮らしができるという利点をもっと具体的に制度化し、メディアで移住したい県として取り上げられる位の思い切った行政サービスに取り組んでいく(子育て世代に優しい町というイメージ)。 <p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 年収700万円の都会暮らしより年収3～400万円の田舎暮らしの方が、毎日の生活が豊かに暮らせるというイメージを広げ、田舎暮らしに憧れている人の移住や出身が徳島県の人へのUターンを促す。 ・ 空き家(マンション・アパート含め)がある大家が登録し、イターン&Uターンの若者に安く提供できるようなシステムを構築(過疎地域を含め)。 ・ 徳島県で若者が結婚し家族をもてるようにサポート。家賃や車、子供の預け先など。 ・ 徳島県で豊かな趣味を満喫できるようなサポート(現実的ではないかもしれないが)。行政サービスとして予約を入れると「釣りセット」「サーフィンセット」「キャンプセット」「船」などを借りることができ、どの趣味を本格的に始めるか、スタート地点として色々とお試しできるサービス等(移住を迷っている人に、試験的に数週間滞在してもらい、豊かな自然を満喫してもらえるようなサービス)。 ・ キーポイントは「安全な食べ物」。豊かな自然といった今あるものをブランディング化し、「田舎暮らし=不便なもの」という従来のイメージから、「田舎暮らし=豊かな暮らし」というイメージにしていくことが大切ではないか。 |
| 2 | <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日本全国的にそうであったように、これまでは人口増加の中ですべてが発展してきた。それに相反し、徳島の中山間地域を含む日本各地の類似の地域は、すでに深刻な過疎化、高齢化、限界集落などの急激な人口減少問題を抱えており、これまでの考え方や価値観では解決しづらい問題の多さを感じずにはいられなかった。 ・ 例えば、生活安全などの面では、地域の人口(特に若い世代)が少なくなってしまう、「自主防災の仕組み」も成り立たない状態があった。また、地域の文化的な面では、これもまた人手不足でお祭りなどの年中行事の開催が難しくなっているという現実があった。 ・ 人口減少に伴う問題に対して、その解決策として人口を増加させることはほぼ不可能であり、人口維持も決して簡単なことではない。 そんな中、少ない人口や、これまでにない人口構成において、私達が「どんなアイデアで未来を創っていかなければならないか」を考えさせられた。 |

| | |
|---|--|
| | <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「1. 生活に最低限必要な機能」と、「2. 生活を潤す文化」、それら両方をバランスを取りながら実現していくことが必要なのかなと思う。 ・「1. 生活に最低限必要な機能」の面から考えると、防災が筆頭にあげられるのではないか。南海トラフ巨大地震の可能性については、甚大な被害が想定されているが、驚いたのは、「震災前過疎」なる現象まで起こってしまっているということ。被害が想定される地域の住民の生活を守るための様々な対策のはずが、将来に対する不安を助長させ、その地での生活を現時点で諦める結果まで招いてしまっていることはなんとも皮肉なこと。このような現実を聞くと、本当に難しい問題であることを実感する。 行政、住民、ともに根気強く考えていく他にないことかと思うが、全ては命あってことで、この課題の解決は欠くことのできない部分。 ・世界中どこへ行こうと、決して100%安心安全とは言えない、災害の可能性と付き合いながら生活していく、その一つの意味が「2. 生活を潤す文化」のように感じている。 徳島に住まう人々が、少しでも生きがいを感じ、充実した毎日を過ごしていくためには、「徳島らしさ」が脈々と受け継がれていくことが欠かせないはず。様々な災害の恐怖や、不便さは種々あるが、人間として生きていくためには、恐らく命を守るだけでは足りない。自然や様々な環境と寄り添いながら、それらに生かされてはじめて人間は生活をできてきたはず。 <p>2</p> <ul style="list-style-type: none"> ・そんな中で育まれてきたのが、その土地々々の文化なのではないか。徳島には、全国に誇る阿波踊りがあり、海があり、山があり、川がある。一言では、全くもって表現しきれない、多種多様な地域性が徳島県内にはあり、そんな小さな文化一つ一つが、徳島の魅力だろうと思う。 それらの文化を守り、住民生活の心の豊かさを育んでいくことが、ひいては住民の生命を守ることにもつながっていくのではないか。 <p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・徳島県には絶対的な何かという強みがあるわけではないのかもしれない。ただ、海、山、川、という自然の基本がすべてあり、それぞれが素朴なままに残っている。私の職業柄、それらはこれからの観光業の貴重な資源になること間違いないと日頃より確信している。 私の勤務地・祖谷周辺を訪れる観光客の方々は皆、絶対的な何かを目指して来るのではなく、祖谷という地域全体の自然とともにある生活文化に触れることを目指して来ているように感じる。徳島県内の他地域についても、同様の魅力が溢れているはず。また、そうした魅力を発信し、観光客などの交流人口を増やすことで、少しでも経済発展、Uターン、Iターンの人口増加にも貢献するはず。 地域に活気が増えれば、地元住民の活力も増し、その土地や自分たちの生活自体を自ら守っていこうという、自立心、自尊心につながっていくと思っている。 |
| 3 | <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「株あわせ」が今後の取組みとして、サテライトオフィス開設のため移住をしてくる企業向けに、社員の生活面とか住居などを全部パッケージ化して提供する事業を考えているという話があったが、すごくいい取組みと思う。 ・徳島といえば、安全な食べ物や、いい意味での田舎暮らしがある。自然を生かしているような趣味が楽しめるというところもポイントになると思うが、そういったことは、徳島にやってきてすぐにわかるものではない。かといって現地の人と仲良くなり教えてもらうまでには少し時間がかかる。そのタイムラグがあることで、「なんか徳島、やっぱりちょっとつまらないな」という時間が長くなってしまうのがすごくもったいない。 <p>3</p> <ul style="list-style-type: none"> ・徳島県として幅広い情報網を使って、各エリアごとに、「この地域で住む」「いきなりやってきて住める」「住んですぐに楽しめる」ようなパッケージをつくることができると移住しやすいし、「徳島っていいな」って自主的に来てくれる社員が増えるのではないか。生活面、社員がすぐ楽しめるパッケージをつくることできれば、もっといいのかなと感じた。 |

| | |
|---|---|
| 4 | <p>(①②③共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 二回の視察で感じたのは、まさしく「人」。美波町でお会いした浜さんは、その後二回ぐらい名前を新聞や雑誌等で見て、時の人に会えたんだとすごくうれしかったが、ああいう方がいることもすごく大事だが、「そういう人材がいかに適材適所にいてくれるか」というのが、本当にこれからの課題。 ・ 私自身は、今まで審議会みたいなところに携わったことがなく、受け身的な気持ちでいたが、今回こういう機会をせっかくいただき、いろんなところで自分自身でも何かを吸収しようと思っている。そういう人材育成に県としても取り組んでほしい。 ・ タンザニアとスウェーデンの青年が徳島に三日間滞在し、帰りの飛行機の中で「徳島すごいよかったね」と感激していたという話を聞いた。徳島には海もあり山もあり川もあり、それは本当に徳島の魅力で、これからも本当に私たち自身も守っていかなければいけないもの。 ・ 一度触れると本当に魅了されてしまうこういう徳島を、これからも持続可能な社会として、徳島県としても守ってほしい。 |
| 5 | <p>(①②③共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 神山のサテライトオフィスの取組みの現場にいて、今すごくおもしろい人たちが集まってきていると、とても前向きに明るく捉えている。 「グリーンバレー」の名前はよく出るが、それを支えているのが、実は町の人だったりとか、徳島県庁との連携がすごく上手くできていること。例えば、シェアカーの取組みは、県庁が空港ビルにかけあってくれるという民間ではできない働きかけを行政が行ったことによって、シェアカーを使って、空港に着いたら、美波は二時間、神山は一時間、三好は一時間半ですぐ行けるという環境を用意できたことで、いろんな企業が入って来やすくなっている。 ・ サテライトオフィスに関しては、行政、民間、地元とが本当に上手く連携して、それぞれのできる分野をそれぞれが働きかけたおかげで、今のようない動きになっていると思うので、今後の徳島らしさとか可能性というところは、それぞれが「上手く連携していく」というところなのかなと感じている。 |
| 6 | <p>(①②③共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 美波の方に行くとき心が安らぐというか、漠然と「いいところだな」と思ったという印象がある。なんとなく「ここは田舎だ」とか「ここは嫌だな」という思いを持っている学生もいるが、そうではなくて、徳島に住んでいる若者自身が、「これはすごい新鮮なことなんだよ」とか「すごく魅力的なところなんだよ」ということがわかるように、「新しいものをつくる」より「今ある徳島のよさ」「今やっていること」に、少し何かエッセンスを加える、例えば見せ方を変えるということだけでも、とても違った徳島になるのではないかな。 お金をかけなくても、今ある徳島の魅力、地域にある魅力、海、川、森というのがあるのではないかなということ、皆さんの話を聞いたり、美波の方に行ってすごく感じた。 ・ 例えば建築の分野では、空き家でも、ただの民家ではなく、日本にはあまり残っていないような民家が放置されているということも、まだまだ佐那河内とかでも多数あると思うし、この二、三年放っておくことによって、今はまだ手を入れたら間に合うものが、時間の流れで人が出ていくことによってなくなってしまうこともあるので、そういう「徳島のよさ」はもう一度どういうところにあるのか、特に建築物で「徳島といったら何があるか」と言われると、あまり有名な建築はないと言われているが、逆に「これだけの民家が揃っているところがあるか」と言われたら、きっとすごくいいものが残っていると思うので、そういうところにもフォーカスした「空き家の活用の仕方」というのもあるのではないかな。他にも農村舞台とか、まだあまり注目は全国的にされていないけど、ピックアップできるところがあるのではないかなと思う。 ・ 「人口減少時代」ということでいろんな課題があると思うが、女性だけでなく、男性も働きやすく育児もしやすい環境を一緒に整えていかないといけないのではないかな。育児休業制度やワークシェアも制度的には整っているが、そこまで活用されてない現状がある。 ここは思い切って、「全国でも徳島県が一番働きやすい場所」ということで、まずは県庁が率先して、「徳島県庁は全国の県庁の中でも一番仕事がしやすく、今から若者が公務員を目指すのであれば、徳島県を受験をしたい」というような、働きやすさという面でもそういう環境をつくれれば、優秀な人材も集まるのではないかな。県庁がやると、市町村や企業も準じることができるので、ニーズをまずは調べないといけないと思うが、働きやすい環境イコール県庁に優秀な人材が集まって、県勢もよくなるのではないかなと感じている。 |

(①②③共通)

- 徳島の課題はありすぎて言いきれないぐらいなので、ポジティブなところで、「どういところがいいか」と言うと多分、「ハートの部分」というか「心の豊かさ」。東京にいたらストレス社会で、ストレスと隣り合わせの生活をしているが、「心の豊かさ」を満たしてくれるのが徳島のいいところだと思う。
でも、「心の豊かさ」というのは、神山もそうだと思うが、自然があれば豊かさという実際そうではなくて、多分、ブロードバンドであったり、インフラがしっかり整っているからこそその「心の豊かさ」みたいなのも多分あると思う。だから、「心の豊かさ」だけではなくて、経済的な豊かさもしっかり県としてのインフラづくりでやっていかなければいけないことではないか。
そうすることで、若者は若者で東京で働いてもやっぱり十分に充実してなくて、「心の豊かさ」を求めて再認識するために徳島に来る。あと高齢者の方々は単に社会福祉施設に入るのではなくて、働いて自分が老後にできること、ご飯をつくることであったり、誰かをもてなすこともそうだが、自分の伝統的な知識を若手に教えてあげることとか、自分が人生でできることをしてあげる。それが働くことなのか、ボランティアすることなのかかわからないが、高齢者の方々もしっかり働けるインフラがつくっていったらおもしろいのではないかな。それも「心の豊かさ」につながってくるかなと思う。
- 7 具体的には、「人口減少」の中で何を増やすかと。交流人口も増やさなければいけない中で、観光はやっぱりもうちょっと力を入れたいなど。特に叫ばれてるのが「インバウンド」で、世界中で各県が今競い合って提案をしている状況の中で、先週、香港の徳島県人会に参加してきたが、「香港へのチャーター便」もすごくいい取組みだと思うし、向こうでの評価もすごく高く、でも他の県と比べたら徳島は四十何位、海外からの旅行者というか滞在者数が低いところもあたりるので、観光としてのインバウンド誘致も力を入れて手掛けていけたらおもしろいと思う。あと、海外旅行者を例えば高齢者がおもてなしする場合に、英語ができないとかいったときに、これもまたブロードバンドが役立つというか、スマホで大体聞かれることをリストアップして、「あそこどこですか」「これですよ」みたいなのを高齢者の方々が言えるような態勢をつくってもおもしろいのではないかと。そういうデジタル化のインフラづくりというの、おもてなしというか、「心の豊かさ」をお互い感じ合うために必要なのではないかなと思っている。
あとは、「心の豊かさ」を感じるためには森づくりだったりとか、街路樹も木が少なかったりするので、55号バイパスでも木があると、朝の渋滞も安らぐんだらうなとか思いながら走ってたりする。「看板が見えない」という苦情もあると思うが、やっぱり木があることで安らぐ部分というのをつくっていったらおもしろいかなと思う。
- 可能性としては、「心の豊かさ」を売るという意味では、徳島はナンバーワンに近いのではないかなと思っているので、やっぱり老後も楽しく暮らせて、お年寄りもみんな移住してくるぐらいの県にできたらおもしろいかなと思っている。

②

- 8 少子高齢化とか過疎化は大きな問題であり、それを防いでいく手立てを考えるのはもちろん大事なことだが、人口ピラミッドとか見てもここ数年はどうしても続いてしまう可能性が高いと思う。そうしたときに、人がどんどん減っていくと、行政にかけるお金や人もどうしても減ってしまうと。そうなったときに、今までどおり、人が徳島県全域に広がっていると行政サービスの質がどうしても落ちてしまうと。そこで考えたのが、行政サービスが厳しくなってきた地域の住民を少しずつ集約していく。行政サービスが潤沢にできるところに、早い話、引っ越してもらい、それに対して助成金を出すとかという手助けをしてはどうか。
これはそんなに簡単ではないというのは重々わかっているが、例えば、「住み慣れた土地から引っ越せ」というのは無茶な話だし、「助成金出すからといって、それに手を挙げると、残された人がますます厳しくなるじゃないか」とか、問題は山積みなのはわかっているが、漠然としたイメージとして思った。
- もう一つは、過疎化対策で、子どもをもっと徳島県で産んでもらわないといけないので、「婚活」をもっと推進してはどうか。そこで徳島県に「婚活課」をつくと。「婚活課」というので、グーグル検索してみるとあまりない。市の課としては、佐賀県伊万里市の「婚活応援課」というのが検索でヒットしたぐらいで、あまり大々的にはないので、それを「徳島県が一番に婚活課をつくりました」とすれば、少しアピールできるのかなと。そうすれば県外から来てくれて、そのまま徳島県で結婚して根付いてくれる方もいるのではないかなと思う。

| | |
|----|--|
| 9 | <p>(①②③共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> 人口減少はかなり大きな問題で、それだけで、労働人口が減るとか、それによって経済が不調に傾いていくといったこともあるし、防災に関してもハード、ソフトの対策を考えても、災害弱者を支える人がまた減っていくという、本当に人口減少や少子高齢化に端を発する問題は、かなり広くて根深い問題だと感じている。 「徳島県が有する可能性」というのは、自然もさることながら、「人」かなと思っている。「人」はかなり重要だし、「人」が宝と。そこで、「徳島県人名鑑」みたいな「人」の名鑑を作って、「こんな人に会いに来てください」「こんな人が外に出ていきますよ」といったリストを作っていくと、「この人に会いたいから徳島に行ってみようかな」とか「こんな取組みをしてるから行ってみようかな」となるのでは。それで、「人」そのものだけでなく、取組みの内容、企業、団体も含めて、いろんなところをリストアップして、徳島県で認定をしていき、それをまず全国、そして世界に発信していくと、かなり可能性が広がるのではないかな。 徳島に「来てもらうにはどうしたらいいか」ということについて、「来てもらう」ことだけを考えるのではなく、こちらから選んで、「こういう人は、こういうところに、徳島に来るとあなたの可能性が広がりますよ」といった提案が行えるような取組みをするのが一つと、「住んでもらう」ということに関しては、観光、交流人口を増やしていくことがかなり重要な要素で、理論的、数值的、統計的にも、観光が増えると住んでくれる人が増えていくと。「観光があつての人口移動というのがある」ということは、研究上でも現在のところ証明されているので、まずは観光で人に来てもらわないといけな。 ポルティスがJ1に昇格して、その可能性はかなり本当に広がったので、それをきっかけにいいところを知ってもらうようなリストを作ってどんどん発信していく。とりあえずは情報発信をしないとダメなので、自分たちで「自分たちがどんなものなのか」「自分たちが住んでいるところがどんなところなのか」という現状把握をしっかりとしていけないとダメかなという気がする。 計画を立てたり、取組みや政策を考えるときに、目標はあるが、「そこに行くまでにどうしたらいいか」というのは、現状を知らないとダメと思うので、今「多分こうだろうな」と思っていることは、もしかしたら既成概念、固定観念にとらわれているおそれもあるので、もう一回、現状をもっとしっかりと把握した後、「ここまでになりたいな」という目標まで、ここの現状と目標のギャップをどう埋めていくかということに、今後の取組みに関するヒントとか、すべきことというのが潜んでいるので、その辺りの把握というのは、しっかりとっておかないといけな。 とりあえずは「人」のリストを作って、「ウィキペディア」とかの一番下に「徳島県人」とか書けるように、そんなところからかなと。これはあまりお金は要らないと思う。まずできるところからやっていって、いろんなところに広がっていけば、取組みをすること自身で活性化にもつながるし、それが成果物として出てきたときに、また外への影響等を考えると、地域の活性化の両面であるかなと感じている。 西の現地視察の感想として、地域での取組みに関して本当に困っている自治体、団体、個人の方がいると思うので、県庁がトップに立ち、県からこうなさいというのではなく、それぞれの地域の自主的な取組みを促すような、すぐ相談ができるような仕組みづくり、態勢づくりとか雰囲気づくりをしてほしい。 |
| 10 | <p>(①②③共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> 視察など通じ、人口減少や高齢化で地域の活力が失われつつあるというのを改めて実感した。特に、津波避難に対して、地元の高齢者の中で「あきらめ感」が見られるというのは非常に衝撃的だった。またそれとは逆に、同じ海沿いでも、サテライトオフィスで若者が生き生きと働いているのが対照的で印象に残った。 サテライトオフィスの取組みは実際に移住される方もいたりして、すごくすばらしいと思うので、今後、徳島にオフィスを構えることのメリットとか、他地域との差別化を図るような取組みが進んだらと思う。 県南部の視察の際、「まつり」がキーワードという話があったが、サテライトオフィスの皆さんが地域の祭りに参加する、また、避難訓練を祭りに見立てた「避難まつり」とか、そういう「まつり」というのが、すごく地域の一体感をつくったりするのに役立つなど。また、もし地域を離れても、祭りにつながりが継続するのではないかなと思う。 徳島といえば、日本を代表する祭りである「阿波踊り」があるが、東京では、地元の祭りには元々昔からの住民しか参加できないが、阿波踊りは「連」に入るとだれでも参加でき、「連」に入って初めて自分の祭り「マイ祭り」ができたというので、すごく喜んでいる人がたくさんいるという話を聞いた。 そこで、この「マイ祭り」というので、徳島の阿波踊りをもっと広くアピールして、日本人みんなの「マイ祭り」になって、スペインといえば「フラメンコ」、アルゼンチンといえば「タンゴ」みたいな感じで、日本といえば「阿波踊り」というような状況になれば、すごく将来の徳島は求心力が上がるのではないかなと思う。20年後、30年後、高齢化が進んだころに、徳島が阿波踊りで全国から注目されて、日本中にむしろ元気を与えていく、「日本に徳島がないと困る」といわれるような県であってほしい。 |

| | |
|----|---|
| 11 | <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ NPOが出している「田舎暮らし移住先人気ランキング」で、一番が長野県、二番が山梨県、三番が岡山県と続いたが、残念ながら徳島はベスト10には入ってなかった。名前が挙がっている県に共通していえるのは何かと考えたら、やはり「発信力」と「先取りする力」と思う。例えば、香川県は「うどん県」と発信しており、熊本県では「くまモン」でかなり知名度が上がっている。「徳島にしかできないこと」とか「徳島でしかできないこと」というのを発信するだけでは他の県と同じ土俵に立っているだけなので、「いかに他の地域がしてないことを先取りしていくことが重要か」ということを感じた。 <p>全国で初めて二回の国文祭をしている「文化に強い徳島」という面からいうと、例えば、ターゲットをお金も時間も余裕のある年配の方に絞れば「俳句」という趣味があり、四国でいえば愛媛の松山が俳句のまちだが、徳島も俳句を楽しめるまちにしていってはどうか。俳句をしている方は、頭の回転も同年代に比べていいし、俳句のネタを探しているところを歩き回ることによって足腰も鍛えられ、より健康的になっていくのではないかと。</p> <p>また、徳島で俳人として有名な方として、少し前なら武原はんさん、瀬戸内寂聴さんも俳句をされており、若い世代では、城東出身の大高翔さんがいるが、こういう知名度を持った方に発信をしてもらうことが大切なのではないかと。例えば、全国的な俳句大会を開催すると、全国から人が集まって来るので、観光客も増えていくのではないかと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 逆に、若い世代にターゲットを絞って考えると、大学生が地元に戻るUターンの議論が昔からあるが、それを逆に捉え、「徳島の大学に来た方は地元に戻らさないぞ」というぐらいの勢いで、大学に来て、徳島で就職して、生涯徳島で暮らせるというようなことになれば最高と思うので、そのためには、例えば、就職先とか、自分で起業したい「アントレプレナー」を育てるということで、「起業しやすいまち」にするといった対策も必要になってくるのではないかと。 |
| 12 | <p>(①②共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 人口減少とか過疎というのは、就労機会に直結していると思う。地域を支えるにはしっかりと仕事がないと、なかなか支えられないというのが現状と思う。 <p>中山間地域の多い徳島県は、農業が中心になる産業と言っても過言ではない。そのためにいろんな意味で農業を強化しなければならぬが、施策、流通とかいろいろ課題はたくさんあるが、やはり農業をしてみたいという方がいないことには何も始まらない。</p> <p>そこで、徳島で生活をしていると、農地ってすぐ身近にあるが、意外と身近であって身近でないような気がする。「田んぼがあるな」とか、実際に小学校とかの体験とかでしたことはあるとは思いますが、それは、「食の教育」という意味が強いような気がする。「食の教育」ももちろん重要だが、「農業の魅力」というのを、小学校とか中学校、高校と伝えることができるような仕組みづくりというのが必要だと思う。</p> <p>農業は所得を得るだけでなく、「国土の保全」とか「国民の食を支える」という非常に「カッコいい職業」だと思う。その「カッコいい」というのがいまいちは伝わってないところがあるので、「カッコいい農業者の名鑑(仮)」に載れるぐらい、カッコいいライフスタイル、ファッションでもいいと思うが、「農業やってみよう」という、小さいときから職業の選択として「農業」が頭に浮かぶような教育というのができたらいいなと思う。</p> <p>それで、農業が盛んに行われたら、そこから食、観光、いろんな意味で波及すると思うので、まず、徳島で一番の産業である農業を身近に感じて、農業をしたいという人が増えるようなものが必要。</p> |

| | |
|----|---|
| 13 | <p>(①②共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> 徳島県人は、みんな都会への憧れを持っており、県外へ出て徳島のよさに気付くという人が多いと思う。ただ、一回都会へ出てみて、帰ってきたいと思ったときに、「就職先、自分のやりたい仕事とかがないので、なかなか帰ってこれない」ということを聞いたりしたので、視察で行ったサテライトオフィスとかで、もっと地元採用を取り入れてもらうようにIターン、Uターンの支援などもやってみたらよいのではないか。 「徳島のよさ」について、「徳島は何もない」と確かに思うが、逆にそれも魅力だと思う。大阪で四年住んでいたが、「何をやるにも並ぶ」のが自分にとってすごくストレスになる。大阪から友達に遊びに来てもらったときに、敢えて何もせずに喫茶店とかカフェに連れて行ったが、「ゆったりお茶を飲める」というのがすごくいいと感動してくれた。そういう「ゆったりしたところ」がいいと思う。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> 人口減少というところで、徳島以外でも言えることと思うが、子育てを見て、すごく大変だというのがわかり、結婚や子育てに希望を持っていない若い方が増えているとすごく思うので、「仕事をしながら子育てがしやすいような環境づくり」と、「出会いの支援」とかもお願いしたい。 妊娠をするために休暇を取る「妊活」について、高齢出産が増えてきていると思うが、聞いた話では、不妊治療はすごくきついらしい。また、妊娠しにくいので「ちょっと休みたい」と上司に言ったところ、「そんないいやん。仕事してよ」と言われて諦めた人もいるので、「妊活」のための休暇を取りやすい仕組みとか支援をお願いしたいと思う。 <p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> この「若者クリエイティブ部会」のように、若い人の意見を県が聞こうとする姿勢がすごく感動というか、勉強にもなるしありがたいなと思うので、違うかたちでもいいので、こういう輪が広がっていけばなと思う。 |
| 14 | <p>(①②共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> 人口減少時代には、高齢化による生活不安の増大といったマイナスのイメージしかわいてこない。2050年には、現在の人口が10万人以下の市町村では人口減少率が30パーセントで、6千人から1万人の市町村ではおよそ半分に減少するといわれている。また世帯類型を見ると、現在の主流である「夫婦と子からなる世帯」は少数派となって、単独世帯が4割、その内、高齢者世帯の割合は5割を超えると予想されている。人口減少と高齢化に伴い、社会保障費、行政コストの増大、住民税収や固定資産税の減少により、地域活力がますます衰退していく懸念があると思う。 こうした中、東みよし町の山間部では、休校となった小学校を活用して、「増川の活性化を考える会」では、「ホタルまつり」とか、ウォーキングをメインにした「もみじまつり」を開催したり、都市住民との交流施設である「増川笑楽耕」で、そばやうどんづくりのインストラクターとして活動されている。「守る会東山」という別の団体は、体育館で5月人形や雛人形を展示した「節句まつり」や運動会とバザーを開催。「西庄良所会」は、「西庄フェスタ」や「水の丸高原ウォーク」を開催して、参加者におもてなしをされているなど、小学校の休校をきっかけに、「地域が衰退していくのを何とかできないか」と地元の元気な高齢者の方々が地域の担い手として活動されている。 今の私たちの世代は、生活習慣が変わり、運動する機会も食生活も変化して、現代社会の生活習慣病も増大していく中で、高齢者になったときに元気に活動できるのかというのが不安であり、今後ますます増加する医療費や介護需要の増大に対応するためには、一人一人の健康づくり、それを支える医療や健康産業の振興、福祉や介護を地域で支える人材の育成が必要になってくると思う。 |

| | |
|----|--|
| 15 | <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 視察等でいろいろ行って見せていただいて、各地にいろんなストーリーがあるんだなと感じた。例えば、「平家の落人」「サテライトオフィス」など。こういう物語・ストーリー、歴史・ヒストリーが残っている、できつつあるというのが非常に興味深いと思ったし、そういう地域社会が是非ともこれからも存続していったほしい。 ・ 高齢化というのは確かに非常に深刻だというのは肌身に感じたことではあるが、それでも「増川笑楽耕」をはじめ、地域の高齢者の方の活躍は非常にめざましいなと。どちらかというと「その下の世代がいかにその人たちの活動を受け継いでいくか」が、より喫緊の課題ではないかと感じている。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 鍵となるのは、一つは理念的には「住民参加」。それから、もう少し実際的なところとして「職とか収入の確保」。この二つが大事なのではないかと思っている。 特に、「住民参加」について言えば、例えば、行政の立場にいる私としては、住民の方にとってお客さんになってしまうのでもなく、要望や不満を言う対象ということでもなくて、「自分自身がその一員である」というような意識を持っていただけるということになればいいと考えている。 行政としては、そのバックアップとかコーディネート、その芽を上手く見つけ出して育てていくことをやっていくべきではないか。具体的には、「住民自治をもっと広げるような制度づくり」に向かって県自体も変わっていく必要があるのではないかと考えている。 <p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「生活を楽しむということ」は、非常に伸びていく可能性を秘めているのではないかと考えている。特にスポーツ、文化などの分野、そういった「楽しむ中にさらに仕事を創り出す」ということが、飛躍の可能性になるのではないかと感じている。 |
| 16 | <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現地視察では、県外で起業された地元出身の方が、地域振興のために帰ってきて「増川笑楽耕」を活用されている事例とか、地元出身の方がサテライトオフィスを美波町に開かれて、地域の方と一緒にまちおこしをされているといった、ゆかりのある方が活躍している事例を見せていただいた。 新聞報道でも、2013年の転出者の人口が2万6千人ぐらいと書かれており、転出者が多いのはあまりよくないということになると思うが、逆に見ると、年間2万人以上の徳島にゆかりを持った方が県外に出て行ってもらっていると。徳島を知った方が県外に出て行って、徳島をPRしてもらえそうな、あるいは徳島に帰っていただけるような方がつくられていっているというふうにも見えるのではないかと。 人口減少はなかなか歯止めが効かないと思うので、そういったゆかりのある方、「つながりのある人口」を増やしていく。また、「つながり」というのも、情報発信の仕方を工夫したり強化することによって、できるだけ「つながる力」を強めていって、ゆかりのある方と一緒に、そして地元に残った方と一緒に地域づくりというのを進めていけるような事例がこれからもできていけばいいと考えている。 |
| 17 | <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ これからの高齢化時代、特に団塊の世代が後期高齢者に入る頃というのは、施設も病院もどこも満床で、あとはどれだけ団塊の世代の方々が、元気にいきいきと長く地域で生活できるかというのが、これからの高齢者福祉対策になっていくのではないかと。 そこで、現役を引退されて間もない団塊世代の方々の今までの能力や知識、コネクティングを活用して、今、県、市町村が抱えている問題について、団塊の世代の方たちに解決方法を考えてもらって実際に活動してもらおう。県はそういう活動を採択して、金銭的補助や事業のバックアップの点で関わり、住民が主体的に問題を解決するといった形で取り組むことによって、コミュニティだったり、町、地域というのが活性化し、団塊の世代の方も長く健康でその場で生活できるというのをつくっていかねばいけないのではないかと。 団塊の世代の方は、インターネットもするし、スマホも持っているんで、同じ町内、同じ村、町に住んでいるというだけでなく、もっと広い意味でのコミュニティというのをどんどんつくって、新しい活動にこれから取り組んでいく必要があるのかなと思っている。 |

- ①
- ・ 現場視察を踏まえ、地域の担い手の減少が大きな課題と感じた。その中で、地域を盛り上げよう、何とかして支え合おうと頑張っている地域というのはたくさんあって、例えば、県西部の過疎地有償運送「NPO法人こやだいら」、「増川笑楽耕」の皆さんなど、たとえ「限界集落」と言われるような地域であっても、あきらめずに創意工夫を凝らしながら取り組まれていて、そういった高齢者の方は、自らが担い手となり活躍されていて、とても元気で活気に溢れているという現状を見させていただいた。
- ③
- ・ 地域をつくるのは「人」だと考えている。そうした中で、本県の一つの可能性として、私たち県職員一人一人が、自分が住んでいる地域に愛着を持って自治会活動や地域活性化に取り組んで、地域に根差した県職員として、地域の皆様とともに「地域を支える仕組みづくり」に取り組んでいけたらと感じている。それにはまず自分自身が地域の一若者として、地域イベントに参加したり、地域の魅力の再発見をしたり、自分自身が地域にとけ込んで地域に役立てるように頑張っていきたい。
 - ・ 「人」に関連してもう一つは、「いかに人を呼び込んで定着させるか」という仕組みづくりが必要と考えているが、徳島が有する可能性として、「人の温かさ」が考えられる。徳島県民には「おもてなしの心」という文化があり、自分の実体験からも、人のつながりというのが強く印象に残るものであって、そうした「人」の魅力というのも一つのポイントとして、リピーターを増やして、人を呼び込むことで外部からの新たな視点ということで気付き、そして魅力をどんどん見つけて発展させていけたらと考えている。

徳島県総合計画審議会設置条例

平成二年三月二十六日

徳島県条例第十号

(設置)

第一条 知事の諮問に応じ、徳島県の総合計画の作成及びその実施に関する重要事項を調査審議するため、知事の附属機関として、徳島県総合計画審議会（以下「審議会」という。）を設置する。

(組織)

第二条 審議会は、委員四十人以内で組織する。

2 委員は、学識経験のある者及び関係行政機関の職員のうちから、知事が任命する。

3 委員の任期は、二年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

4 委員は、再任されることができる。

(会長及び副会長)

第三条 審議会に、会長一人及び副会長二人を置く。

2 会長及び副会長は、委員の互選によって定める。

3 会長は、会務を総理する。

4 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき、又は会長が欠けたときは、あらかじめ会長が指名する順序に従い、その職務を代理する。

(会議)

第四条 審議会の会議は、会長が招集する。

2 審議会の会議は、委員の半数以上の出席がなければ、開くことができない。

3 審議会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

(専門委員)

第五条 審議会に、専門の事項を調査審議させるため、専門委員を置くことができる。

2 専門委員は、学識経験のある者の中から、知事が任命する。

3 専門委員は、当該専門の事項に関する調査審議が終了したときは、解任されるものとする。

(部会)

第六条 審議会は、その定めるところにより、部会を置くことができる。

(雑則)

第七条 この条例に定めるもののほか、審議会の運営に関し必要な事項は、会長が審議会に諮って定める。

附 則

1 この条例は、平成二年四月一日から施行する。

2 徳島県総合福祉計画審議会設置条例（昭和五十七年徳島県条例第二十三号）は、廃止する。

附 則（平成二五年条例第四一号）

1 この条例は、公布の日から施行する。

2 この条例の施行の日の前日において徳島県総合計画審議会の委員である者（改正前の第二条第二項第二号に掲げる者として任命された者に限る。）は、この条例の施行の日に、解任されるものとする。

徳島県総合計画審議会部会設置規程

（設置）

第一条 徳島県総合計画審議会設置条例（平成2年徳島県条例第10号）第6条の規定に基づき、徳島県総合計画審議会に宝の島・とくしま創造部会（以下「宝の島部会」という。）及び若者クリエイイト部会（以下「若者部会」という。）を置く。

（組織）

第二条 宝の島部会は、委員及び専門委員をもって組織し、その定数は14人以内とする。
2 若者部会は、原則40歳未満の委員及び専門委員をもって組織し、その定数は10人以内とする。
3 宝の島部会及び若者部会に属する委員及び専門委員は会長が指名する。

（部会長及び副部会長）

第三条 宝の島部会及び若者部会に、部会長を置き、会長が指名する。
2 部会長は、部会の事務を掌理し、部会の審議の経過及び結果を会長に報告するものとする。
3 部会に副部会長を置き、部会長が指名する。
4 副部会長は、部会長を補佐し、部会長に事故があるときは、その職務を代理する。

（分掌）

第四条 宝の島部会は、いけるよ！徳島・行動計画（以下「計画」という。）の推進に関し、次に掲げる事項について調査検討する。
一 計画の推進方策に関すること。
二 その他、計画推進上必要な事項に関すること。
2 若者部会は、県政運営に対する若者の自由な発想による政策の提言等について調査検討する。

（会議）

第五条 宝の島部会及び若者部会は、部会長が招集し、部会長が議長となる。
2 宝の島部会及び若者部会の会議は、部会に属する委員及び専門委員の総数の半数以上の出席がなければ、開くことができない。

（雑則）

第六条 この規程に定めるもののほか、宝の島部会及び若者部会の運営その他宝の島部会及び若者部会に関し必要な事項は、会長が別に定める。

附 則

この規程は、平成17年2月18日から施行する。
この規程は、平成19年7月9日から施行する。
この規程は、平成22年5月31日から施行する。
この規程は、平成23年12月2日から施行する。
この規程は、平成24年12月5日から施行する。

徳島県総合計画審議会「若者クリエイイト部会」委員名簿（敬称略・50音順）

（◎部会長 ○副部会長）

| | 氏 名 | 現 職 等 |
|----------|---------|--------------------------------------|
| 総計審委員・4名 | 蔭山 洋子 | フリーアナウンサー |
| | 川眞田 彩 | （特非）新町川を守る会会員 |
| | 近森 由記子 | 徳島県青年国際交流機構事務局長 |
| | 樋泉 聡子 | （特非）グリーンバレー職員 |
| 専門委員・6名 | ◎ 青木 正繁 | ソーシャルワーカー |
| | 池添 純子 | 阿南工業高等専門学校助教 |
| | 岡田 育大 | （株）フォレストバンク代表取締役 |
| | 竹内 祐介 | （株）ダックソフト システムソリューショングループ 徳島チームマネージャ |
| | ○ 福島 明子 | 四国大学講師 |
| | 村松 享 | （特非）麓庵トラスト事務局長 |

徳島県総合計画審議会「若者クリエイイト部会」オブザーバー名簿（敬称略）

| | 氏 名 | 所 属 等 |
|----------|--------|--------------------------|
| 徳島県職員・5名 | 板東 純平 | 政策創造部総合政策課主任 |
| | 高木 和久 | 経営戦略部財政課主任 |
| | 榊原 陽子 | 保健福祉部東部保健福祉局（吉野川保健所）主任主事 |
| | 山下 哲央 | 南部総合県民局県土整備部（那賀）主任 |
| | 島 知佐 | 西部総合県民局企画振興部（美馬）主任主事 |
| 市町村職員・5名 | 小原 和浩 | 徳島市企画政策課係長 |
| | 蔵本 聖子 | 小松島市契約検査課主事 |
| | 松本 秀明 | 神山町産業建設課係長 |
| | 石井 里奈 | 板野町総務課主事 |
| | 釋子 由香梨 | 東みよし町企画課係長 |